いのち華やぐ

瀬戸内寂聴

講談社

いのち輝く……一九八六年十月二〇日第一刷発行……一九八七年十一月四日第四刷発行……
◉著者◉瀬戸内寂聴……©宗教法人曼陀羅山寂庵 1986, Printed in Japan……
◉発行者◉加藤勝久……
◉発行所◉株式会社講談社 東京都文京区音羽二丁目一二番二一号 郵便番号一一二 電話東京〇三三九四五二一一二(大代表)……
◉造本◉杉浦康平+赤崎正一……◉印字◉森山写真タイプ+プロスタディオ……
◉印刷所◉凸版印刷株式会社……◉製本所◉藤沢製本株式会社……◉定価◉一〇〇〇円……
……落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。……
……なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。……
……◉著者住所◉京都市右京区嵯峨鳥居本仏餉田町七一……ISBN4-06-202874-3(0)〈文1〉……

いのち華やぐ……目次

命なりけり……8
晩年のかがやき……12
愛にはじまる……16
ある晩年……20
ついのすみか……23
灰のぬくみ……27
末期の目……30
この年になって……33
思えばこそ……36
旧友……40
死後の始末……43
死への覚悟……47
老いもたのし……50
赤いコンパクト……54
ある京女の最期……57
渡水看花㊤……60

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

渡水看花㊦……63
横川の行……66
微笑仏……70
嵯峨野僧伽落慶……73
摩訶不思議……76
遊戯三昧……80
一滴文庫……83
たのしい夫婦……86
共に泣く……90
遂業証書……93
長く歩いた裁判の道……96
良薬口に甘し……100
不幸のかたち……103
老女の孤独……106
最後の言葉……109
利賀フェスティバル……113

辻奎子さんの死……116
生命について……119
虫の音……122
遺族の悲痛……126
お手玉……129
到彼岸……132
秋へんろ……136
金木犀……139
杉箸のにおい……143
甲山事件……146
月下美人……149
受難・ふたたび……153
戒名について……156
法臘……159
あんず句会……163

秋すぎて……166
晩年……170
柚子実る……173
雪大文字……176
日記について……180
七種のあと……183
最後の幸せ……186
人のいのち……190
神の証し……193
冬へんろ……196
針供養……200
畑打ち……203
真珠のネックレス……206
アイ ラブ オール……208
再婚の手本……212

いのち華やぐ

瀬戸内寂聴

◉命なりけり

年々にわが悲しみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり

◉岡本かの子がこの歌を、代表作の小説の一つ「老妓抄」の結びに据えたのは、かの子四十九歳の時であった。かの子は小説家になる前に、歌人として知られていて、この歌も自選歌集に収めているくらいだから、快心の作だったのだろう。その翌年、五十歳で死んだかの子にとっては辞世の歌ともいえよう。

「老妓抄」は、小そのという老妓が、出入りの若い電気屋の技師の、性ぬきの無償のパトロンになり、発明をしたいという男の夢をかなえてやろうとするが、男は老妓の老いを知らぬみずみずしい好奇心と生命力に圧倒されて、かえって無気力になっていくという筋である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◉男を飼うというモチーフは、晩年のかの子の作品にしばしば見られたものだが、老妓ほど放胆に男を飼った小説は他に見ない。行き届きすぎた老妓の庇護の許に、次第に生きるパッションを萎えさせていく男に向かって、人に惚れるにしても心の底から惚れ合うべきで、お互いが切れっぱしの惚れ合い方で、ただ何かの拍子で出来合うのはつまらないといい、

「仕事であれ、男女の間柄であれ、混り気のない没頭した一途な姿を見たいと思う。私はそういうものを身近に見て、素直に死にたいと思う」

と、述懐する。

◉小説には老妓の年齢は書いてないが、およそ六十代半ばだと想像される描き方がされている。未知なものにあこがれる好奇心を失わず、あきらめを知ろうとしない老妓のいのちの華やぎは、またかの子自身のものであった。

◉五十歳にして童女のように見えたというかの子は、三十四、五歳から仏教に触れ、四十歳ころには仏教研究家としても、女性の第一人者にな

っていた。かの子の仏教観は、抹香臭いものでなく、生きている限り、いのちを極限に押し開いて生ききるというもので、むしろ生命の讃歌であった。

◉かの子は不意に訪れた死の直前まで、恋をしていた。内助の夫として稀有に彼女に尽くした岡本一平があり、彼女のために人生の軌跡を狂わせ、彼女の死ぬまでそばにいて、一平と共に彼女を支えた新田亀三という恋人がいた上の話である。その恋がプラトニックであろうとなかろうと、詮索する要もない。

「わが悲しみ」と歌うかの子の「悲しみ」は、センチメンタルなものではなく、もっと人間の内奥を貫く、いのちの嘆きといったものであろう。生まれた瞬間から限られた生と死を約束され、ものの命を取り、それを自分の生きる糧にし、他人の犠牲の上に、自分の幸福をきずかねばならぬ宿命を負った人間の、逃れ難い業を自覚した深い悲しみであった。

◉かの子はこの歌を作る時、西行法師の、

年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

という絶唱を想い浮かべていないはずはない。

◉西行がこの歌を詠んだのは、七十歳で、東大寺の砂金勧進という名目の、奥州（のはるかな旅の途上であった。七十の老年の旅路を、「いづくにかねぶりねぶりてたふれふさむ」という決死の覚悟で歩いていた。西行もまた沙門の身でありながら、最後まで歌を作る煩悩を断ちきれないまま、あきらめを知らない情熱の持ち主であった。七十三年で花の下に望み通りの大往生をとげた西行と、夫と恋人に看（み）とられ五十歳で逝ったかの子と、その生の軽重は問わない。

◉ふたつの辞世の絶唱の中から響きわたるものは、悲しくも美しいかけがえのない人間の、命の貴さであり讃歌のように思われる。

◉――晩年のかがやき

◉宇野千代さんは、今年十一月、満八十八歳のお誕生日を迎えられる。米寿のお祝いには、盛大なパーティーをしようと、二、三年前から楽しみにしていられ、

「その日は振り袖で三度お色直しをするのよ。あなたも出席して、三度法衣のお色直しをなさいね」

と、私におっしゃった。その顔色の何と晴れ晴れと明るかったこと。

◉その宇野さんが、

「米寿を人生の或る区切りだと考えると、これから後は、私の晩年と言うことになる」

と、正月の新聞に書いていられた。私は声をだしてひとり笑ってしま

った。初笑いである。

◉常々、宇野さんは自分の年齢を気にしないといっていられる。米寿を迎えられるまでに、還暦も、古希もすでに迎えられているはずである。宇野さんはそれらの人生の関所のようなものを、すっと風のように、何の抵抗もなく通りぬけてこられたのだろう。

◉還暦になるのを待ちかねて、仕事をやめ、まるで人生が終わったように、自分からすっかり老けこんでしまう人もあれば、宇野さんのように米寿になってはじめて、ようやく晩年意識にめざめる人もある。

「ただ、無意識に押し流されて、年をとるのではなく、一種の、意識を持った、年月の過ごし方を考えて行きたいものだ」

と、宇野さんは米寿の年頭に考えると、即実行に移され、原稿用紙に向かい、「晩年」という題の小説に取り組まれるのである。何という意欲的で若々しい晩年であろうか。

◉宇野さんはお逢いする度、

「私たちは小説を書くという仕事を持っていてほんとによかったわね」

と、口癖のようにおっしゃる。死ぬ日まで小説を書きつづけられたらどんなにいいだろうという願望を、宇野さんは、ぼんやり願っているのではなく、そのために、一日に一万歩歩き、ビルの三階のお住まいには、階段を上り下りされ、読書にもマージャンにも意欲的に取りくまれ、若い人たちにも門戸を広く開き、好奇心は年と共にますますさかんで、おしゃれには細やかに心を配っていられる。

◉米寿を迎えても、初めての経験は面白いといわれ、あらゆることに積極的にのぞまれる。おそらく宇野さんは、卒寿までも悠々と生き、いっそう華やかな晩年を照り輝かされることだろう。

◉九十三歳で大往生をとげられた荒畑寒村氏は、九十歳で念願のスイスのアルプスに登るという憧(あこが)れを果たされた。

◉荒畑先生も最後までお気持ちがお若く、おしゃれで、私が文中に寒村翁と書くのを厭(いや)がられて、

「翁なんて書かれると、どこの爺(じじ)いかと思って、自分のような気がしない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com